

## 《卒業研究報告》

## 人種差別とロールモデルとしてのスポーツ

谷井 一郎 (天野ゼミ)

## 第1章 研究の目的

大学の講義の中で人種差別について学んだ。私の知り合いや私自身に外国の血が入っていることもあり、様々な人種の人々と話をする機会が多い。学生の時や大人になってから差別を受けたという話を聞き、衝撃を受けたこともある。同年代の友達の多くは、気にすることはあっても滅多に口にしないので、差別は目に見えにくいものになっているからである。こうしたこともあって、私は人種差別について興味を持った。人種差別は、いまでも変わらず、主要な社会問題の一つである。

人種差別の問題の大きな原因は、帝国時代の植民地支配における差別にある。そして黒人の人種差別の大きな原因は、奴隷制にある。現代の日本に生きる我々にとって、奴隷制度は単に歴史的な事実として、知識として学ぶものにすぎず、過酷な人種差別は遠い過去のことだとされることが多いと思われるが、人種差別は依然として根絶されてはいない。奴隷制の時代や帝国主義の時代から続く問題は、今に至ってもなお解決していないのである。新型コロナウイルスの蔓延は、黒人だけではなく、アジア系に対する人種差別の存在も露呈させた。そして新型コロナウイルスのパンデミックにより浮き彫りとなった人種差別に対し、ヒューマン・ライツ・ウォッチは、「各国政府は、新型コロナウイルス感染症 (Covid-19) のパンデミックに関連した人種差別と外国人嫌悪 (ゼノフォビア) に基づく暴力や差別の防止に向けた緊急対策を講じるとともに、アジア人やアジアに

ルーツを持つ人びとへの人種差別に基づく攻撃を訴追すべきだ」と指摘した（「新型コロナウイルス感染症 アジア人差別と外国人嫌悪の世界的激化」2022年5月2日）。

人種差別は遠い話ではなく身近な問題である。本論では、人種差別の歴史と現状について考察した上で、さまざまな努力によって人種差別を克服する営みを粘り強く続けているスポーツ界の営みを参考にしながら、その解決に向けての方法論を構想していくことにしたい。

## 第2章

## 第1節 本稿における考察対象

実社会における人種差別は、居住地域の制限や恋愛・婚姻の制限、社会経済的地域つまり階級階層的な差異など、さまざまな側面で顕在化している。つまり現在においても、人種の違いによって社会的に不当な扱いを受けることは、事実として存在する。

しかしながら現在、差別が何であるかの定義はいささか曖昧であり、多くの場合、たとえば法律の分野においてさえも、差別と区別は使い分けられていないように思われる。そこで本論文では考察の対象となる差別を「その人が本来持っている可能性を伸ばそうとする営みや試みを、個人または集団に付随する特性、または架空に作られた特性に基づいて阻害すること」。具体的には、宗教による差別や人種差別・学歴による差別・男女差別・出征による差別といったものに限定して考察

していくことにしたい。

## 第2節 人種差別の事例

内閣府の平成29年度の世論調査には、日本国内における外国人への人種差別についての項目がある。この調査では日本に居住している外国人に関し、現在どのような人権問題が起きているかを聞いている。調査結果を見ると、「風習や習慣の違いが受け入れられないこと」を挙げた割合が41.3%と最も高い割合を占めている。「就職や職場で不利な扱いを受けている」が30.9%、「アパート等への入居を拒否されること」が24.6%。そして「差別的な言動をされること」が22.4%、「職場、学校で嫌がらせやいじめを受けること」が20.6%となっている。

次に、アメリカ合衆国における人種差別の事例を詳しく見ていくことにしよう。最近起きたジョージフロイド殺害事件は記憶に新しい。2020年5月、アメリカ中西部ミネソタ州のミネアポリスで、ジョージフロイド氏が白人の警察官から首に膝を押し付けられた事件である。この事件をきっかけに、黒人差別に対する抗議活動が広がった。ミネソタ州の人権局は、約10年分の警察官のボディカメラの映像や文書をチェックするのに加え、聞き取りなどを行うことになる。その調査報告書によると、2010年からの約10年間の間に警察が関与して死亡した住民の93%が、人口の42%にすぎない有色人種と先住民であった。同報告書は警察官の取り締まりが黒人に偏っていたことに加え、人種・女性に対し日常的に差別用語を使うなど、組織として偏見に満ちていたことを指摘している。

こうした差別の現実について、本多量久は「アメリカ合衆国(以下、アメリカとする)の黒人社会学者W.E.B.デュボイス(1868~1963年)は、「20世紀は、カラーライン(肌の色に基づく境界線)の時代である」(Du Bois 1903: xxxi)と 言った。これは、

20世紀初頭になされた指摘であるが、彼の警告は21世紀になっても色褪せていない。都市部における黒人の高い失業率、劣悪な住居環境、家庭の崩壊、高い犯罪率、教育問題(Wilson 1987 21-31)など構造的な問題は今日も解消されていない」と指摘した(本多, 2005, p159)。彼はデュボイスの言を引きながら、現在も人種による差別が続いていることを、再確認したのである。

スポーツ界においては、競技内では差別は存在しなくなった。しかし、観客の間ではしばしば人種差別などの差別行為が発生し、人種差別に苦しんだ選手が抗議に至ることは少なくない。そしてそれは、日本も例外ではない。近年では、2014年に行われた浦和レッズ体対サガン鳥栖の試合において、浦和レッズのサポーターが、観客席で「JAPANESE ONLY」という横断幕を掲げている。これにより、日本における人種差別が問題視されることとなった。それだけではない。日本のスポーツ界には、外国人や国内で暮らす在日コリアンについて、出場や記録を認めないなどの差別が存在するのである。

海外でも、スポーツ界における差別の事例は多い。2020年の8月のサッカー欧州チャンピオンリーグでは、フランスのパリ・サンジェルマン対トルコのバシヤクシェヒルの試合において、人種差別的な言動があった。試合開始15分以内に、バシヤクシェヒルのアシスタントコーチであるカメルーン人の黒人ピエール・ウェボー氏に対して、差別的な発言がなされたのである。ウェボーはこの行為に対して抗議し、その抗議に賛同した両チームの選手が試合をボイコット。ロッカールームへと戻っていった。その後、試合は正式に中止が決定され、前半14分で試合が終了し、翌日に再開すると発表された。

アメリカでは、2020年に猛威を奮った新型コロナウイルス感染症を背景として、アジア系差別による暴力事件が、2021年に続け様に発生している。

ニューヨークのベーカリーの列に並んでいた中国系の女性が、新聞箱に頭を押し込まれた事件。西海岸のサンディエゴで83歳のフィリピン系の女性が、突然殴られた事件。サンフランシスコで83歳の男性が、歩行中に押し倒され腰の骨を折った事件。これらの事件を受けサンフランシスコ警察は、アジア系住民が多く住む地域を中心に見回りを強化することになったが、それにもかかわらず同年3月には、ジョージア州のアトランタでアジア系女性が6人殺害される事件が発生している。

アメリカ合衆国の非営利団体ストップAAPIヘイトは、2021年3月に報告されたアジア系住民などへの差別・事件をまとめ、報告書を発表した。これによると2020年3月19日から2021年2月28日の間に報告された差別的な事件は3795件。事件の内訳としては、「言葉による嫌がらせ」が70%、「敬遠」が20%、「身体的暴行」が11%である。発生した場所は、ビジネスの現場（店舗・飲食店などのサービスを受ける場）が35.4%、路上が25.3%。オンライン上は10.8%であった。差別をされた人たちの割合は中国系が最も多く42%であり、次に多いのが韓国系で15%。その他は各10%未満で、日系は6.9%であった。被害者の68%は女性であった。年齢別では26歳から35歳が30%と最も多く、36歳から45歳が20%、18歳から25歳が16%であった。発生した地域を州別に見ると、カリフォルニア州が1691件と全体の約45%、次に多いのがニューヨーク州の517件で全体の約14%。なお、ワシントン州は158件で全体の約4%であった。

次に、ヨーロッパにおけるコロナ禍による差別の事例について見ることにしよう。2020年3月、スペインの首都マドリードに滞在している中国系アメリカ人が2人の男から人種差別的な暴言を浴びせられ、これに言い返したところ、一週間の入院が必要になる暴行を受けた。英国においても新型コロナウイルスによるパンデミックによりアジア人差別や外国人嫌悪が急増し、2020年2月には

タイ人の会社員の男性が強奪され骨折する重傷を負った。その後も複数の類似した事件が発生している。ロンドンでは中国系シンガポール人の留学生の男性が「俺の国にお前のコロナウイルスはいらない」という言葉と共に暴行を受け、顔面に重傷を負った。その後、類似事件が発生し、中国人、シンガポール人やベトナム人、韓国人なども被害に遭っている。

こうした事例からわかるように、実社会においては、いまだに人種差別が残っている。では、スポーツ界はどのようにして、差別を克服していくことができたのだろうか。

### 第3章

#### 第1節 スポーツ界における差別克服の歴史

MLBにおける人種差別の克服は、公民権運動と並行して展開している。

1947年4月15日、近代におけるMLBで初の黒人のメジャーリーガーが誕生した。ジャッキーロビンソン選手は1947年、当時ニューヨークブルックリンに本拠地を置いていたドジャースに入団する。（ちなみに、現在の本拠地はロサンゼルスである）黒人選手としてメジャーリーガーになったジャッキーロビンソン選手は、さまざまな差別や偏見と立ち向かうことになる。彼の自伝映画には、その当時の状況そして彼の闘いが、わかりやすく描かれている。以下では、その中からいくつかのエピソードを挙げることにしよう。

- ・ドジャースの選手がバス移動する途中、給油のためガソリンスタンドへ立ち寄った際に、白人専用のトイレしかないため黒人は外で用を足せという趣旨の言葉を受けた
- ・白人選手はホテルに泊まれるが、黒人であるジャッキーロビンソン選手は宿泊することができないという趣旨の言葉を受けた。
- ・白人が多く住んでいる地域にジャッキーロビン

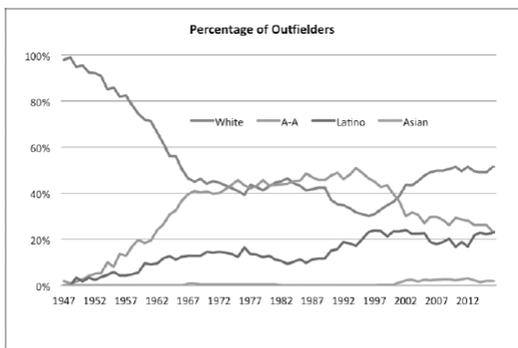
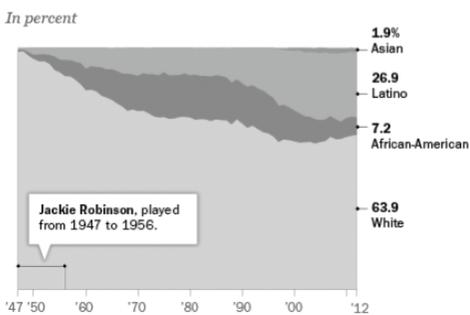


図1 メジャーリーグでプレーする人種構成 (PEW RESACH CENTER より)

**Race/Ethnic Diversity of Major League Baseball**



Source: Society for American Baseball Research  
PEW RESEARCH CENTER

図2 ジャッキーロビンソンのプレー後の人種構成の変化 (SOCIETY FOR AMERICAN RESACH [Baseball Demographics, 1947-2016] より)

ソン選手が住むようになると、彼を追い出すために、多くの人たちから家を狙われた

差別的な扱いは、プレーの現場でも行われている。

・ジャッキーロビンソン選手がプレー中、相手ベンチから「綿花畑に帰れ」という言葉を投げつけられた。この言葉は、奴隷制度時代の黒人を連想させる極めて悪質な発言であったが、当時、この発言を咎める人はいなかった。

ジャッキーロビンソンがメジャーリーガーとなった当時は、どれだけ才能があろうと、黒人選手という理由で拒絶する人が多かった。こうした差別に耐えられず、スポーツ選手の夢を断念した人も多かった。そしてジャッキーロビンソンもまた、同様の洗礼を受けた。彼も当初は、ブルックリンドジャースのファンだけでなくチームメイトの人たちからも、拒絶されていたのである。しかし彼は、他の黒人選手とは本質的に違った。「やり返さない勇気」という信念のもとに、自身に対して行われた差別に耐え、我慢するだけでなく、10年の間で首位打者や盗塁王、MVPを獲得し、六回にわたるチームのリーグ優勝にも大きく貢献したのである。こうした彼の態度そして行動は、次第にチームメイトの心を動かすことになる。彼らは次第に、暴言を浴びせかける相手チームに抗議するようになり、球場内で肩を組んでジャッキーロビンソン選手の味方であるという姿勢を示すようになっていった。彼の成績が記録されるにしたがって、彼を認める観客が次第に増え、球場全体の雰囲気が変わっていった。ジャッキーロビンソン選手が活躍していくにつれて殺害予告などが増えたのは事実だが、それ以上に彼を認める声が増えていったのである。

彼の活躍は、白人以外の選手の割合の変化に、大きな影響を及ぼした。1950年以降ジャッキーロビンソン選手のデビュー後次々と各球団で黒人選手が誕生したことは、統計の数字に如実に表れている。(図1)

図1、図2のグラフは両方ともメジャーリーグにおける人種間のプレーヤー構成のグラフであるが、図1を見ると、より細かく人種ごとの数字の変化を知ることができる。このグラフによれば、1947年以前は100%近くが白人で構成されていたことがわかる。そしてジャッキーロビンソンがメジャーリーガーになった1947年以後、黒人のメジャーリーガーの数が急激に伸びていった。ここ

から、1947年から10シーズンにわたる彼の活躍に影響されて、また、彼の活躍によって白人以外のメジャーリーガーに対する社会全体の意識が大きく変化して、黒人のメジャーリーガーが多く誕生したものと推測することができる。彼の活躍に後押しされ自身もプレーしたいと思う者、貧困から抜け出すために野球で金を稼ぐ者、人によって動機は様々であると考えられるが、プレーヤーとしてメジャーリーグに挑戦する白人以外の選手が以前より増えたのは事実である。ジャッキーロビンソン以前は10%未満だった黒人選手の割合は（グラフ上では「A-A african american」と表記）、1957年には約20%までに増えた。約10年間で20%近く増えた背後には、ジャッキーロビンソンの影響力、そして彼の活躍による社会的意識の変革があったものと考えられよう。そしてこの時期には、ラテン系の選手のメジャーリーグへの参入も増えた。フェルナンド・タティス・ジュニア選手やブラディミール・ゲレーロ・ジュニア選手、そしてファン・ソト選手など、現在のMLBの顔と言える選手たちの多くはラテン系の選手である。約70年前に活躍したジャッキーロビンソン選手がいなければ、彼らの台頭はなかったのではなからうか。このように考えれば、彼がメジャーリーガー、そして野球界に与えた影響は、とてつもなく大きいといえよう。

## 第2節 公民権運動とアスリート

こうしたアスリートたちの活躍は、公民権運動と深く結びついている。黒人アスリートたちが受けた差別的な処遇は、社会全体で行われていた差別の縮図であった。黒人アスリートたちからは公民権運動を支持する動きが多く見られたが、その中でもジャッキーロビンソンの行動そして活躍が与えた影響は大きい。彼はいかに差別されてもそれに耐え、暴力に訴えることはなかった。そして自分のプレーに集中して成績を上げ、チームの勝

利に貢献した。その姿は、公民権運動に関わる人々に勇気を与え、運動を成功させるための活力になったのである。

公民権運動に関わった著名人の中には、モハメド・アリやビル・ラッセルもいた。モハメド・アリは、自らの活躍によって英雄扱いされても待遇が変わらないという事実に対して声を上げ、自身のライセンスが剥奪されることも顧みず黒人の地位向上を叫んだ。彼は暴力から黒人を護る団体である「Negro Industrial and Economic Union」(NIEU)の会合で徴兵拒否について語ったほか、数多くの講演にも参加し、学生などを相手に黒人の権利についての演説を行なった。世界的に知名度のあるアスリートの言葉は、この運動を活発化させた。彼が活躍すればするほど、公民権運動に参加している人たちの間に、「自分たちはできる」という気持ちが広がっていった。

ビル・ラッセルもまた、公民権運動に積極的に関わったアスリートであった。彼はキング牧師の演説を最前列で聞くだけでなく、1964年の公民権法、1965年の投票権法の法制化を指示しサポートした。全米黒人地位向上協会のメンバーとして積極的に活動し、徴兵を拒否したモハメド・アリを支持してアリと共に戦うだけでなく、自身の所属するNBAチームのボストンセルティックスの本拠地ボストンにおいて、NIEUの活動の一環として、平和的なデモ行進を主催したこともあった。彼は自著の中で「ここ四世紀の中で初めてアメリカの黒人たちが自分自身の歴史を作ることができる。その瞬間に立ち合えるのは、経験できうることの中で最も意義のあることの一つ」と綴っている。

公民権運動の担い手として世界的に名高いのはモハメド・アリだろう。しかし、黒人の人権問題で声を一番に挙げたのは、ビル・ラッセルだった。ここで名前を挙げた選手だけでなく、当時活躍したアフリカ系アメリカ人のアスリートたちはみ

な、公民権運動と密接に関わっていた。

## 第4章

### 第1節 実力主義の社会になるには何が必要か

スポーツ界では、才能と努力により開花した実力を社会が認めるという形で、人種による差別が徐々になくなっていった。ここから、差別のない社会を実現する上で、実力主義が大きな可能性をもっていることが示唆される。では、スポーツ界のような実力主義が認められる社会を実現するためには、どのようなことが必要なのだろうか。ここではこのことについて考察していくことにしたい。

本論で考察の対象とした差別の概念においては、差別が存続する最大の要因は「差別される側」ではなく「差別する側」、つまり「受け入れる側」にある。そして多くの場合、「受け入れる側」は、人を実力ではなくその人の階級特性・文化資産・コミュニティ・家族・生活基盤で評価し、扱いを決めてしまう。ただし、本論で考察の対象とする差別を克服するために検討しなければならない要素は、実はそれだけではない。「差別される側」の集団の中から実力によって評価され「差別されない」ようになる人が生まれた場合には、今度は逆に「差別される側」の集団からの妬みを受けることがあるからである。このように考えれば、差別をなくすためには、「差別する側」のコミュニティだけでなく、「差別される側」のコミュニティのあり方も変えていく必要がある、ということになる。それは具体的には、黒人差別をなくすためには、黒人社会全体が良くなっていくような仕組みを根付かせていく必要がある、ということである。

### 第2節 人種や社会属性で評価されないために

アメリカのスポーツ界における差別克服の論理は、「スポーツはその人の実力を評価する実力主

義である」＝「社会属性に左右されずに社会階層間の移動を行うことが可能」＝「社会環境が恵まれない下層の人であっても、能力次第で評価されれば、地位や社会的信用を確立することができる」というものであった。これを実現する上で最も重要なことは、公正な「評価基準」の設定であろう。幼少期から段階を上がっていくごとに評価基準を設けること、様々な評価項目を設定すること。これは、教育だけの分野に限ったことではない。あらゆる分野でその分野に相応しい評価基準を設け、コミュニティのメンバーがその評価を正しく受けることによって、その人自身の実力を評価する仕組みを作ることが求められる。社会属性によって教育や将来の機会を奪われることがなく、その人の可能性を制約しないようにするためには、社会属性に左右されない公平な評価が必要なのである。そしてスポーツ界においては、そうした理念に基づいた人材育成の試みが行われ、成果を上げつつある。

ここでは、その中でも特に目に見える成果を上げている、メジャーリーグの事例について取り上げることにしよう。メジャーリーグは2006年、郊外に移転する経済的な余裕がない家族を対象に、都市の貧困地区であるインナーシティに住む子供たちが、野球と触れ合える環境を創出する活動として、ロサンゼルス近郊のコンプトン市にある大学内にアーバン・ユース・アカデミーの創設を行なった。ここでアーバン・ユース・アカデミーとは、MLBと選手会が合計3000万ドルを基金に出資して、メジャーリーグ（MLB）が直接運営を行い、元MLBプレーヤーらがボランティアによって年間無料指導を提供するなど、各チームから様々な支援を受けて成り立っているアカデミーである。このアカデミーでは、8～17歳の少年・少女を対象に様々な野球プログラムを無料で提供する。

MLBはアカデミー開設の先駆けとして、18年

の間でRBI (Reviving Baseball in Inner Cities) というプロモーションを展開している。都市部に住む低所得者層の子供たちの野球人口拡大を目指す様々な取り組みである。その背景には、アメリカ国内における、野球についての世代間断層があった。都市部の貧困層の子供たちにとって、野球用具を取り揃えることは容易ではない。そのため、リトルリーグが終わる13歳頃になると、全体の75%が野球を辞めてしまっていた。MLBは、そのような子供たちが自身の活躍する場を設け、彼らが家庭の事情を理由に自身の進路を狭めなくて済むようにする試みが続けたのである。こうした活動の先に、このアカデミーが開設されることになった。

アカデミーのプログラムは数週間の短期プログラムから1年間の長期プログラムなど様々である。カリキュラムのみならず施設も充実している。他大学と連携してプレイヤーを育てるためのプログラムがあり、それに加えて、野球関連のカリキュラムであるトレーナー、グラウンドキーパー、各種メディア活動などのカリキュラムも提供している。アカデミー出身者は強豪大学やプロに進出し始めている。その他にも、ある大学でプレーできなくなった選手が、このアカデミーに通いながらメジャーリーグ球団のLA・ドジャース(ロサンゼルス・ドジャース)との契約を結ぶなどの実績を上げている。また、1年間を通しMLB選手たちも参加するイベントを実施するなど地域密着型の活動を展開して、地域との連携も強めている。

この事例は、実力主義のシステムを社会実装することで、社会から差別をなくしていく試みを行っていく上で、大いに参考になるものと思われる。「受け入れる側」の変化により、コミュニティや家族・生活基盤が変化すること。実力をつけた人物が評価されることを妬むのではなく、彼を目標とし誇りとする意識。そして、後に続くものが生まれてくるような仕組みが定着していく可能性

を示唆しているからである。実力を発揮する場所を提供する仕組みが地域社会に定着すれば、社会属性ではなく実力で評価される文化が生まれ、それが差別を克服する上で大きな力となるはずだ。

#### 第4節 実社会において差別をなくすために

スポーツ界における人種差別克服の歴史が示しているのは、(1)家庭環境や人種などにより他者を評価するのではなく、その人本人の実力を評価することにより、人種による差別が少なくなる、(2)所属する階級により人を判断しないことが可能になれば、階級間の移動が頻繁に行われることになる、(3)その結果、階級や家庭環境により自身の進路選択が狭まることもなくなる、ということである。本稿ではこのような考察をもとに、実社会において差別をなくすためには、適切な評価基準のもとで人々の実力が公正に評価される実力主義のシステムを、広く社会に定着させる必要があると主張した。

また、実力主義のシステムを差別の克服に活かすためには、「受け入れる側」のコミュニティだけでなく「受け入れられる側」においても、メンタリティの変化、および文化変容が求められることを指摘した。さらに、「受け入れられる側」において望ましい変化が生まれるためには、才能に恵まれ努力を惜しまないほんの一部の人々だけでなく、地域やコミュニティ全体の変化が必要であることを指摘した上で、その実現のために参考となる事例としてMLBによるアーバン・ユース・アカデミーを取り上げ、その活動と実績についての考察を行い、こうした活動を一般社会に応用すべきであると主張した。

価値観やライフスタイルが多様化し、液化化と称されるほど変化の激しい現代社会においては、差別の克服という大きな問題について本論で取り上げたスポーツ界における試みが応用できる場面は限られるかもしれない。また、コロナ禍や戦争

など、非日常的な状況下においては、克服したはずの差別意識が突然目を覚まし、大きな事件を引き起こすことも珍しくないだろう。しかし、差別および差別意識に基づいた事件をただ単に表面的に押さえ込むだけでは、こうした事態を根本的に解決することはできない。その結果、同様のことが繰り返し発生することになる。その意味で、それらの事件を生む原因すなわち、差別や差別意識の温床となる社会構造や社会意識にまで目を向けて、差別の根を構造的に解消していこうとするスポーツ界の粘り強い試みは、社会的に見て実に意義深いことであり、差別のない社会の実現のため、様々な領域・分野において、適切な形で応用されるべきことといえるのではなからうか。

#### 参考文献リスト

[雑誌論文]

- 武本晶三、1962「アメリカにおける社会階層と教育の諸問題」、『室蘭工業大学研究報告』室蘭工業大学、4:241-265。
- 井上俊、1993、「スポーツ社会学の可能性」、『スポーツ社会学研究』日本スポーツ社会学会、1:35-39
- 本田量久、2005、「人種の排除構造に関する社会学的考察 —リコンストラクション期(1)から1960年代までのアメリカ合衆国を背景に一」、『応用社会学研究』立教大学社会学部、47:159-173

[ウェブページ等]

- BASEBALL GATE、「野球大国・ドミニカの現状～後編～ドミニカ野球少年、メジャーリーグアカデミーまでの道程【WORLD BASEBALL vol.26】」、2019年9月1日 (<https://baseballgate.jp/dailybg/worldbaseball/702846/> 7月5日アクセス)。
- BBC NEWS JAPAN、「【解説】なぜアメリカで大勢が怒っているのか 人種に関する3つのデータ」、2020年6月4日 (<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-52916317.amp> 2022年7月2

日アクセス)。

- BBC NEWS JAPAN、「米アトランタなど3カ所のマッサージ店で発砲 アジア系女性ら8人死亡」、2021年3月17日 (<https://www.bbc.com/japanese/56427449.amp> 2022年5月25日アクセス)。
- CNN.co.jp、「東アジア系留学生、ロンドンで集団暴行の被害 新型コロナウイルスで募る差別感情」、2020年3月4日 (<https://www.cnn.co.jp/amp/article/35150261.html> 2022年5月26日アクセス)。
- CNN.co.jp、「アジア系に対するヘイトクライム、世界中に存在 新型コロナで一層悪化」、2021年3月22日 (<https://www.cnn.co.jp/amp/article/35168178.html> 2022年7月20日アクセス)。
- COSMOPOLITAN、「アジア人の私が考える「アジア系差別」が黙過されている理由」、2021年3月12日 (<https://www.cosmopolitan.com/jp/trends/society/a35776796/how-to-support-asian-american-community-hate-crimes-violence/> 2022年7月18日アクセス)。
- Federico A、「Chart of the Week: The Rise of Latinos in Major League Baseball」2019年2月 (<https://visme.co/blog/mlb-demographics/> 2022年7月2日アクセス)。
- FINDERS、「差別の少ないオランダで「日本人差別」を受けて初めて気づいたこと【連載】オランダ発スロージャーナリズム (31)」、2020年12月24日 (<https://finders.me/articles.php?id=2507> 2022年7月19日アクセス)。
- 林茉莉子、2020、「英国における新型コロナウイルス感染拡大とアジア系コミュニティの状況」([https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section\\_4/2020/09/post-201886.html](https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section_4/2020/09/post-201886.html) 2022年6月19日アクセス)。
- JETRO、「新型コロナ禍でのアジア系への人種差別、カリフォルニア州で報告最多(米国)」、2021年3月23日 (<https://www.jetro.go.jp/biznews/2021/03/d27ee8a4faba9b2f.html> 2022年5月23日アクセ

ス)。

菊池慶鋼、「NPBには真似できない？ジュニア層獲得に真剣に取り組むMLBの遠謀」2017年1月26日 (<https://news.yahoo.co.jp/byline/kikuchiyoshitaka/20170126-00067020> 2022年6月15日アクセス)。

Mark L、「Baseball Demographics, 1947-2016」(<https://sabr.org/bioproj/topic/baseball-demographics-1947-2016/> 2022年5月4日アクセス)。

内閣府広報室、「[人権擁護に関する世論調査]の概要」2017年12月、(<https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-jinken/gairyaku.pdf> 2022年7月2日アクセス)。

THE DIGEST編集部、「[冗談でもあり得ない] ジャッジが36歳ベテラン同僚の“黒人差別発言”に憤慨！MLB機構の処分発表を受け「ミスから学ばないと」、2022年5月24日 (<https://www.google.co.jp/amp/s/thedigestweb.com/baseball/detail/id=56370%3fmobileapp=1> 2022年7月3日アクセス)。

The sporting news、「MLB 黒人選手の割合が2012年以降最高に」、2018年4月17日 (<https://www.google.co.jp/amp/s/thedigestweb.com/baseball/detail/id=56370%3fmobileapp=1> 2022年7月1日アクセス)。

安田聡子、「差別してきた「ニグロリーグ」の記録をMLBが公式認定。「私たちは間違っていた」、2020年12月17日 ([https://www.huffingtonpost.jp/amp/entry/mlb-negro-league\\_jp\\_5fdab051c5b650b99ad987f4/](https://www.huffingtonpost.jp/amp/entry/mlb-negro-league_jp_5fdab051c5b650b99ad987f4/) 2022年7月15日アクセス)。

結城史隆、「スポーツと社会」、特定非営利法人ビューコミュニケーションズ投稿論文、2017 (<http://www.viewcom.or.jp/wp-content/uploads/2018/04/11cec34699a253574804158734823a2a.pdf> )。